●「赤心」継がん
Dream 五代塾 Godai Juku Sinbun（新聞）
第13号
発行：Dream 五代塾
吹田市千里山西5-14-17
発行責任者：理事長　川口 建

2023 新春 インタビュー

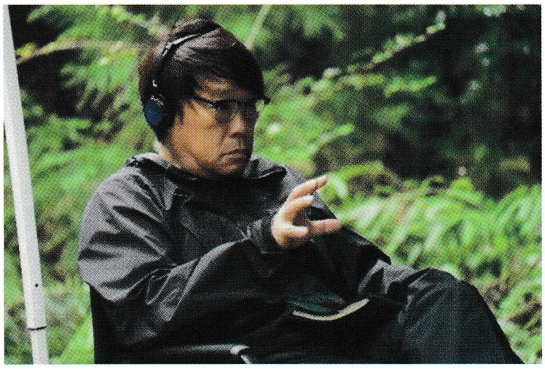
田中光敏映画監督に聞く（後編）

五代友厚と 映画「天外者（てんがらもん）」と 三浦春馬と

〈前号インタビューより続く〉

－大阪商法会議所での熱演は大変感動し、魂の叫びのような演説は鳥肌が立ちました。役者魂を超え、何か現代の我々に何かを訴えるように感じました。監督と春馬さんとの間で何か打ち合わせのようなものがあったのでしょうか－

（田中監督） いや、もちろん話をしましたし、もうここが最後の最後というか、本当に映画の中でも見せ場だっていう話も彼にはしました。1日かけて撮りました。もっともっと長くというか、何度も何度もやったシーンもあります。春馬君がとにかく「自分の思っているエネルギーを全部出し切りました」っていう風に現場で助監督に言っていたのを撮り終わる寸前に助監督が僕にわざわざ言いに来てくれたんです。その後、最後のラストの言葉を取って大阪商法会議所でのシーンは終わったんですけど、あのシーンも実は本当は予算の都合上、滋賀県だとか京都の中のお寺で取ろうっていう話があったんですけども、どうしてもそういう風にはしたくなくて。それはちょっと春馬君にも話はしていて、僕のイメージとしては上から目線ではないけれども、抑圧するような形ですが沢山の人たちがヤジを飛ばすっていう、つまり、すり鉢の中の一番下にいるのが五代友厚というイメージで、ヤジを飛ばす人たちを見上げながら、何か話をしているシーンにしたいっていう思いがあって。最後の最後まであそこのロケ場所って決まらなかったんですね。結局、松竹の撮影所のみなさん、つまりプロデューサーや美術さんが、「監督わかった、監督のやりたいことは十分わかったから、撮影場もやっと空いたスペースができたから、そこで監督の思うセットを組もう」と言って、そこでセットを組んでいただいて、あのシーンがああいう形で取れるようになった。一番最初に現場を春馬君に見せた時も、「こういうことですよね」って、彼も納得してたし、それぞれのパートとそれぞれの役者、そして我々も含めてそういう環境も含めたところで、ああいう場所が作れて、やっとあのシーンに至った。ただ、本当に僕も「俺についてこい！」って言ったあの台詞っていうのは、なんか、今までの三浦春馬を超えたところで、彼は新しい自分を出してるなっていう感じはしていて、僕もそうだし、僕の周りのスタッフも本当に鳥肌が立ったぐらい、彼のその迫力っていうのはあったと思ってます。



のちに、実はここのシーンってすごくセリフは大切だったんで、アフレコでセリフを変えているんですね。要するに大阪のことなんだけれども、今の日本に足りないこと、今の世界に足りないこと、今の指導者に何かものを言いたいこと、っていうことをまっすぐにぶつける演説にした方がいいっていうことで、実は途中のセリフを、のちに、東京の東映撮影所で吹替えているんです。

その時に三浦春馬君に来てもらって、春馬君に一旦編集したものを見せて、ここと、ここと、ここ、こういう風に変えたいんだ、って言って、春馬君に見てもらって、あれっと思ったら、春馬君がそれを見終わった時にちょっとこう目頭を押さえてて、「いや、監督、感動しちゃいますよ。僕本当にこれ一生懸命やったんで、もうこれだけで泣けてきますね」って。春馬君には完成した作品を観てもらうことができなかったんですけれど、まあ、それが今でも自分の中で引きずっているというのは、正直あるんですが、あの時の春馬君のことばで救われたというか・・・。ただ間違いなく彼は自分のやったその作品を見て、本当に前のめりに見てくれていたし、自分がやったことを非常に肯定的にとらえてくれてたんで、ああよかったなと思いながら、一緒に東映の撮影所でアフレコをやっていたのを記憶してますね。

主演に完成した作品を見せられないまま公開を迎え、今、なお、年に数回、上映が続いていることに自分の中に何か残っているものはありますが、あの時の彼のことばと笑顔が僕の心の支えとなっています。

－三浦春馬、三浦翔平、西川貴教、森永悠希、激動の幕末・維新の偉人たちの特徴がうまく表現されていたと思います。監督としての指導、気配りなど多々あったと思いますが、そのあたりの苦労やエピソードを聞かせて頂けますか－

（田中監督） もちろんそういう指導というか、それぞれのキャラクターだとかっていう話はしてますし、翔平君に至っては春馬君と東京のプライベートな時間で、カラオケボックスだとか、レストランの個室だとかで本読みをやったりしながら、役作りをしてくれて

いたし、ここにいる西川さんや森永さんや葵ちゃんやみんな一度は春馬君と一緒に仕事をしていた人達で、彼自身もキャスティングで我々が色々苦労している時に、自分の仲間に声をかけてくれた人たちでもあるんで、僕と役者っていうことよりも、僕と三浦春馬とその主演を支える役者たちで、本当にコミュニケーションを取りながら、それぞれの役を作っていったところがありますね。だから翔平君がやった龍馬っていう役は、ほぼ東京で春馬君とやり取りをしている中で一つこう見えてきたことだったんじゃないかなっていうふうには感じてますけどね。

まあ、本当に、そう、蓮佛さんも含めてですけど、よくコミュニケーションが取れた役者仲間たちが、よくぞこんな風にして集まって、一本の作品をこう作り上げてくれたなあっていう風に思ってます。

－それは春馬さんの熱量が他の人に電波したということですね－

（田中監督） 勿論そうですね。彼は時代劇は初主演で、まあ言ってみれば初座長。やっぱりその時代劇のトップで座長としてみんなをまとめていくっていう意味では、本当に彼は周りの役者たちに気を使っていろんな形でやってくれたと思いますね。それはもう間違いないですね。

－映画「天外者」の上映が、今、前例が無いような公開後毎年年3回ほどの特別公開されている現象は、三浦春馬さんのファンという方々の力が非常に大きいかなと思うんですが、その春馬さんファンの熱量を今どう感じておられますか－

（田中監督） 有り難いの一言です。大変感謝してます。

春馬君と現場で話をしてた時に、この映画で海外へ行きたい、海外上映をしたい、ということは春馬君自身が本当に言っていたことだったし、たくさんの人たちにこの時代劇を見てほしいということを、彼も言っていた。だからこそ、ちょっとキャンペーン頑張んないとね、っていう話をしながらやっていたところがありました。

この2年間の間に上海の映画祭であったり、ハワイの国際映画祭だったり、いろんな映画祭に参加させてもらい映画の賞をいただいたり、春馬君自身に主演男優賞を頂くことにもなったりで、それって結局ファンの人たちの力というか、映画を見てファンになった方、元々ファンだった方たちがこの「天外者」っていう作品映画を、三浦春馬が主演する映画の背中を押してくれて、たくさんの人たちの手によってこういうものを取れたことっていうのは、春馬君良かったなっていう想いは僕の中ではあります。

春馬君のファンもすごいなっていう想い、それと同時に、彼の力、やっぱり役者としての力と想いみたいなものが強かった、それが結果こういうことになっていってるんだなって思ってます。

ファンの皆様には本当に感謝したいですね。それは間違いないです。

－映画「天外者」、ご自身の作品ですが、今振り返りどのような自己評価をされますか－

（田中監督） 映画っていうのは世の中に出してから見ている人に育ててもらうものだ、と、今まで沢山の先輩たちに教えてもらいました。

この作品で初めて経験したんですけれども、製作予算もなかった、たくさんの配給映画館を開けるだけの予算もなかった、コマーシャルもできなかった。この様な状況の中で、コロナの時期でもあったんですけれども、見ている人たちが何度も何度も劇場に通い、ネットで書き込みをしてくれたり、電話をしてくれたり、映画館に声をかけてくれたりしていただいたことで映画館がその映画館自身を開けてくれるということをして頂いて280館以上の全国での公開になりました。それは本当に映画を見ていただいた人たちに映画の背中を押していただき、映画を育てていただいた、それをやっぱり目の当たりにしましたね。

だから僕が街を歩いていたりとか北海道だったり、いろんなところを歩いていて、こんなに「あの映画を見たよ」って声をかけていただいたことは今まで初めてですね。そういう意味では僕も忘れられない作品になったし、僕にとっての宝物でもありますね。

春馬君が主演作を見られなかったということはありますが、僕は本人はちゃんとどっかで見てくれてんのかなと。今もこれだけたくさんの人たちが見てくれているっていうことは、もう彼のところに届いてんじゃないんですかね。なんかそんな感じはしますけどね。

－映画「天外者」から話は変りますが、今年はどのような映画制作に取り組まれる予定でしょうか－

（田中監督） 今、映画制作は2作手がけています。一つは、映画「親のお金は誰のもの 法定相続人」で、志摩市を舞台に「人の幸せの在り方」を考える、社会派ハートフルコメディーの映画です。今年の秋頃に公開を予定しています。

もう一つは、映画「北の流氷」（仮題）ですね。この映画は砂漠化したえりも地域（浦河町、様似町、えりも町、広尾町）の豊かな森と海をよみがえらせた史実を題材に、日本人の魂、あるべき姿を未来へ伝承していくことをテーマにした映画です。こちらは、年内に準備、クランクインを目標に進めています。

いづれの映画も各地域と連携し進めていますので、皆様には是非ふるさと納税で映画への参画と応援お願いしたいと思います。

－最後になりますが、昨年の12月1日付けで、大阪芸術大学芸術学部映像学科長に就任されましたが。このお仕事はどのような内容でしょうか。－

（田中監督） 今度は映画だとか映像を作る僕のような人間たち、若い子たちを育てるところを少し担わせてもらおうかなということです。自分の担当する授業だけではなく、全体も見なきゃいけないし、学生だけで650人位いますし、先生や職員も含めると大所帯なので、これからは現在進めている映画制作とのスケジュール調整が大変になってきます。

－益々ハードになって大変ですね。でも、人材を育てていくということが、映画を通じて未来の新しい日本を作っていく、そういう気概を持った人、意識になっていけば、素晴らしいことですね。そういう意味ではものすごく大きな影響力がありますね。映画というのは素晴らしいですね。

長時間のインタビュー、ありがとうございました。田中監督には益々のご活躍お祈りいたします。－

（聞き手：川口由美子）

五代の生涯の偉業「弘成館」鉱山業（四）

Dream 五代塾顧問　八木孝昌

半田銀山天皇行幸の背景

明治九年（一八七六）六月二十一日に明治天皇の半田銀山行幸がありました。時の内務卿大久保利通のもとで殖産興業政策が推進されていましたが、その中で鉱山は産業発展のための資源を確保する点からも、金銀産出によって国家財政を潤す点からも重要な分野でした。五代友厚の半田銀山が行幸先に選ばれたのは、明治維新以来、五代と懇意な関係にあった内務卿大久保が、国家政策と自己の人脈とが重なる地点で行った判断であると見ることができます。しかし、大久保と五代の人間関係というとき、同郷薩摩の友人関係というような枠組みのことではありません。

明治元年（一八六八）二月十五日に堺港で土佐藩の警備隊がブランス海軍の兵士一人を殺害するという国際事件が起きたとき、大坂外国掛参与であった五代は獅子奮迅の働きをもって事件収拾に当りました。そのとき大久保は政府中枢で事態解決に奔走しており、この国難事件は大坂の現場と京都の政府の連携によって解決されました。また、明治七年（一八七四）年から八年にかけては、大久保利通に対立して下野した木戸孝允らを政府に復帰させるために大久保が大阪の五代邸に滞在して対策を講じた「大阪会議」において、五代は大久保を支えて国難回避に寄与しています。このふたつの出来事に自らの関与もあった明治天皇にとって、五代は印象に残る存在であったに相違ありません。半田銀山選定の遠因にはこのような背景も作用しているのではないかと見られます。

半田銀山全景

大久保利通の「巡検」

前号で半田銀山の工場濁水処理について鉱山側と地元村民との間で「締約書」が交わされたことを書きました。これは現在の公害防止協定に当たります。日付は明治九年（一八七六）七月八日付です。その締約書の前文には、工部省鉱山寮の鉱山師長による洗鉱濁水と土泥の「分析書」をもとにして対策を講じるとあります。分析書の日付は六月二十一日です。

これらの日付と最初に見た明治天皇行幸の時期が重なっています。そこには何か関係があるのか。今回はそれを考えます。

半田山鉱長の吉田市十郎による「大久保内務卿巡検記」（『五代友厚伝記資料』第三巻）が残っています。そこには大久保卿が天皇行幸を前に「六月七日午後二時二十分」に内務省役人二人と福島県役人一人を伴って鉱山の視察に訪れたことが書かれています。福島県の中条権参事から「坑業の事」と「洗鉱濁水の事」を申しあげるようにと言われて、吉田が大久保に「洗鉱濁水が種苗を害するとの口実を以て、毎年三月末より九月中旬に至るまで休業する」ことになって難儀していると説明。村民の言い分は「過慮の誤解頭脳に感触し、正理を忘れ」ている状態ではあるが、「友厚より再々穏便忍耐致し候様申渡」もあるので、交渉を続けている間は休業している次第であると述べます。

すると話を聞いていた中条権参事が、もし分析上で洗鉱濁水の無害を証明する資料があれば見せるようにと求めます。それに対して吉田は、自分たちは「碩学の舎密家（せいみか。化学者のこと）に非ざれば」分析は困難であると答えます。巡検が終わると、大久保は吉田を呼んで、「五代の命令を辱めず、其職に恥ざる実効を観取せらるゝ旨」を伝えるとともに、「一層勉励して国家盛大の為に出鉱を尽力する旨」をお命じになったと「巡検記」は記しています。その記録の日付は「六月八日」です。

「分析書」の出現と「締約書」の締結

『五代友厚伝記資料』中の「大久保内務卿巡検記」の次には、政府機関の「鉱山寮」から「半田銀山稼人　五代友厚殿」に宛てた通知文が載っています。日付は「六月廿三日」です。内容は、半田銀山坑内濁水分析の先般の出願について、当寮師長が試験したので、その結果を通知する、というものです。そして鉱山師長ゼー・ジー・ヱッチ・ゴットフレー名の分析結果には「坑水」の成分と「沈殿物」の成分が記載され、次のように結論づけられています。

右の次第に因て、此坑水は其浮動含有物を沈定して全く清浄ならしむる上は、植物に何等の妨害をも及すことなし。

東京千八百七十六年六月二十一日

注目されるのは、大久保の「巡検」に際して鉱山責任者の吉田が鉱山休業の実態を伝え、「洗鉱濁水」の分析は素人の手には負えないと説明したのが六月七日で、二週間後の六月二十一日には「分析書」が出来あがっているということです。そしてこの「分析書」による安全性の保証を受けて、「これまでの工場排水処理のための溜池三カ所に加えて、四カ所の溜池を新築して、泥砂沈殿処理を行う」旨の「締約書」が七月八日付で結ばれていることです。

急転直下の事態解決です。それは、内務卿大久保が半田銀山の状況を知って必要な手を打った結果ではないか、と推測できる理由が三つあります。

①天皇行幸に際して、鉱山と地元村落が対立している状況は不都合であること。

②鉱山振興は国策上不可欠であること。

③かつて自己の窮地を五代に助けられた大久保にとって《恩返し》の好機であったこと。

半田銀山の飛躍的発展

半田銀山は「締約書」締結をもって休業状態を脱し、フル稼働に入ります。前号で見たように、明治一〇年代中葉には産出量も増大し、収支も改善しました。地元桑折町文化記念館の発行になる『半田銀山の歴史』（佐藤次郎著）は、その隆盛を次のように描いています。

半田は銀産額で明治七年、四千百六十匁（もんめ。一匁は三・七五グラム。一五・六キログラム）が明治十七年には百八十七万七千三百七十八匁（七、〇四〇キログラム）と約四百倍の生産量を持つ驚異的な発展をなし、その時の佐渡は七十八万九千九百匁（二、九八二キログラム）、生野は四十一万五千百十八匁（一、五五七キログラム）であり半田銀山が随一であった。

このようにして半田銀山は天皇行幸を契機に停滞から発展へと転換します。その転換には内務卿大久保が大きな役割を担ったと見ることができそうです。（次号は休載）

「夤縁阿附（いんえんあふ）」しなかった男 五代友厚

Dream 五代塾 顧問　曾野豪夫

五代友厚の人となりは、鹿児島で代々石高三〇〇石前後の藩士の子として文武両道の道に励み、若くして薩摩藩から選ばれて幕府の長崎海軍伝習所に入所し、欧米文化に直接触れる機会を得た。そして幕府の鎖国体制にありながら藩主に対して薩摩藩の若者十数名の英国への密留学を進言し、驚くことにそれが藩主に受入れられ、副使の一人に選ばれて総勢十九名が慶応元年訪欧したことによってご存知の通りである。明治維新となり五代は栄達が約束されている官界に身を置かず、明治二年下野して衰退した大阪の商工業の振興に終生尽くしたことも読者ご存知の通りである。

しかし、我々の子供や孫たちは高校教科書で、五代は薩摩藩出身の政府高官に取り入って明治十四年、北海道の開拓使官有物払下げを受けようとした怪しからん商人であったと教えられてきている。

五代は実業に基づいて地元関西或いは国家のために事業を興したが、単に金儲けのために出身地薩摩の仲間である政界の大物に口利きを頼んだことはない。開拓使官有物払下事件は、東京横浜毎日新聞が「この情報が真実であるか虚偽であるかをまだ知らない」として書いたゴシップ記事が発端で、他紙がそのまま転報したのだった。十日後、朝野新聞が「毎日新聞の説には誤りがある」との記事を書いたが既に政治問題化してしまっていた。五代は、黙したまま四年後亡くなった。「赤心の人」だった。本紙創刊号より標題の左肩には、「赤心」継がん、と会員に呼びかけている。多くの五代を慕う者、世話になった者、親類縁者も理路整然と声を出して世評に抗することができる者はいなかった。しかしながらごく数名の史実に則して五代の業績を追求し続けた先生方がおられた。そのご尽力のおかげでマスコミに五代は開拓使官有物の払下げに関わっておらず、将来の教科書も改訂されてゆくであろうことが発表されると仄聞している。

Dream 五代塾セミナー

第7回セミナー（実施）

五代友厚ゆかりの地探索③

案内人：川口建

日時：2023年3月4日（土）10時～13時

場所：北浜・堺筋本町・天満辺り

●北浜交差点（五代友厚像対面）集合・出発⬇光世証券・五代友厚像⬇大阪取引所・五代友厚像⬇大阪金相場会所跡⬇大阪会議開催の地跡花外楼（旧加賀伊）⬇天五に平五 十兵衛横町⬇高麗橋⬇里程元標跡⬇大阪銀座の跡⬇西町奉行所跡・初代大阪府庁・大阪府博物場跡⬇大阪商工会議所・五代友厚像⬇大阪活版所跡⬇釣鐘屋敷跡⬇三橋楼跡⬇八軒家浜船着場跡（永田屋昆布本店）⬇京屋忠兵衛跡（新選組定宿）⬇熊野かいどう案内石碑⬇旧桜宮公会堂（旧造幣寮鋳造所正面玄関）⬇泉布観⬇造幣局（外観及び入場門他）⬇造幣博物館●（後、自由参加で懇親会）

造幣博物館内で参加者集合写真

冬から春へと季節の変わり目。爽やかな1日、ついつい時間オバーも忘れ遅い目のお昼になったが、またこのひと時が楽しい。今日は総勢16名で町中を練り歩いた。

今回のコースは五代友厚像3体と対面でき、初めての人には特に満足でき、また、五代さんとは直接のかかわりはないが見どころが多いコースで、古地図を見ながら上町台地のアップダウンの体験、旧淀川である大川から天神橋・難波橋辺りで堂島川と土佐堀川に分かれる分岐を明治以降に大きく変化していることの確認、東横堀川の水門、等々、自分の足で確認することもいい体験となり、歴史への理解が深まるのではないでしょうか。

現在Dream五代塾では、大阪市内探索コースは①・②・③の3コースを準備しています。適宜実施、またご要望があれば企画しますので興味のある方はご参加ください。

第8回セミナー（ご案内）

参加者募集中・詳細はHP参照

4月23日（日）　五代友厚の名誉回復に尽力された八木孝昌先生と、田中光敏映画監督のダブル講演会。今年も映画「天外者」は4月5日全国上映が決まりました。当日は興味深いお話が聞けそうです。

ふるさと納税で田中光敏監督の映画制作を応援しませんか!!

①「親のお金は誰のもの」法定相続人

志摩市を舞台に「人の幸せの在り方」を考える、社会派ハートフルコメディーの映画。今年の秋頃に公開を予定。

②「北の流氷」（仮題）

1950年代に森林伐採で砂漠化した荒れ地に（浦河町、様似町、えりも町、広尾町）地元漁師らが木を植え続け、豊かな森と海をよみがえらせた史実。日本人の魂やあるべき姿を未来へ伝承することをテーマにした映画。年内に準備・クランクインを目標。

■ふるさと納税は「寄付金の使い道」を選ぶことができます。サイト内には「映画制作事業」が設定され、これを選べば、田中監督の映画製作を直接応援することができます。申込方法⬇各市町のHP、又はふるさと納税の各サイトが準備されています。右の各QRはその一例として楽天QRを掲載しました。

浦河町　様似町　えりも町　広尾町

編集後記

HPQR

トルコで2月に起こったトルコ、シリア大地震被害は甚大だ。映画『天外者』田中映画監督の前作『海難1890』は和歌山県串本大島にて遭難したエルトゥールル号の乗組員を村人達が助けその恩をトルコの人たちが忘れず、1985年イラン・イラク戦争時に、日本人の救出に日本からの救援が来ないときトルコがこの恩を返したと言う内容だ。今回この映画を東映とイオンシネマ25館の協力で再上映され、その入場料のすべてをトルコ支援のため寄附するとのこと。

ここでも田中監督が映画を通じて表現している、日本人の気質、本質である窮地に陥った人には分け隔てなく思いやり、正直に生きる、お天道様が見ているという美徳がいかんなく発揮されていると感じた。しかし現在を鑑みるとそれが薄れて来ているのではと寂しく、悲しく思う。　（川口由美子記）

（連絡先：川口建）
Email:gogoken12345@gmail.com
Tel:080-4497-5688
HP:https://www.dream-godai.com